〔館員随想〕

花　火　と　仏　像

― 秋の台湾を訪れて ―

この秋、台湾（中華民国）の首都・台北市では、主な二つの博物館で、時を同じくして、中国の仏像の特別展覧会が開かれていました。国立故宮博物院の「彫塑別蔵宗教編特展」と「歴代金銅佛造像特展」、国立歴史博物館の「仏雕の美一」と冠した二つの特展、「北朝佛教石雕芸術」と「宋元木雕佛像精品展」、更に「法相の美―金銅佛造像特展」です。両館共に複数のこれだけ多くの仏像展を同時に開催できるというのは、中国の優れた仏像がさすがに自国には数多く残されていると言うことでありましょう。仏像ファンや研究者にとっては将に垂涎の的とも言える催しです。春以来忙しかった仕事の合間を縫って、これらの展覧会のみを目指して、久し振りに台北を訪れました。

台北市の北の郊外にある故宮博物院で、別館の一館全てを占めて今年4月8日（釈迦の生誕日）から始まった「雕塑別蔵一展」は、12月31日までの長い開期です。各所蔵家（店と財団）からの北魏～明時代の石雕86点に、宋の大型木雕と木胎泥塑、明の漆夾紵（乾漆）と三彩の像などの珍しい作品を加えた総数100点の展示です。86点の石雕の内、北斉のものが最も多く29点、次いで唐が19点、北魏と東魏が10点ずつで、飛鳥仏への傾倒からその源流である北魏仏のコレクションが多い日本とは異った傾向を示しているようです。いずれも単独像か三尊像で、東魏と北斉のものは殆どが山東省出土であるのも特徴です。北周は二度の廃仏の為に、わが国においてと同様に作品が少なく、観音菩薩像の一点のみでした。全体では東魏から宋までの菩薩像が交脚や半跏思惟像を含めて半数近くを占め、柔和な表情や豪華な宝冠・瓔珞の様々な形の美しさを堪能しました。中でも東魏の菩薩頭部は、満面に溢れる生き生きとした微笑で、一瞬ギリシャのクーロス像を思わせます。隋代の菩薩立像は唐の前代として肉体が肥満的ともなりますが、その美しい宝冠や瓔珞には北斉・北周の継続が見られます。如来像では、大和文華館の立像と共通点を持つ力強い北魏の像や、優雅な東魏の三尊像が際立っていました。山東省出土の北斉の如来像は頭髪や衣相が多様で、普通見ることの少ない彩色を残している法界人中像（袈裟に六道図を表わしたもの）が複数あり、珍しいものでした。

「歴代金銅一展」は、10年前に特別展を開いた後、その一部を当博物院が入手した、新田棟一氏旧蔵の金銅仏33点の展示です。常設展に近い形で、もう一つの別館全体を占めていました。博物院の元来の所蔵品は歴代皇帝の宮廷美術であるという性格上、仏像コレクションは無く、これが始めてのものとなったようです。五胡十六国から明代までの流れが良く分かる選び抜かれた作品で、西蔵も含まれています。光背裏面に仏伝図をびっしりと浮彫りした、北魏太和元年（477）の如来坐像など、新田氏の邸宅で手に取って拝見したものがあり、懐しくも惜しくも思われました。唐の三作品が盛唐・中唐・晩唐の違いを良く示しており、大理国の菩薩像や、西蔵の影響の濃い細緻な造形の明代の天像なども、改めて見直す思いでした。

南の元の台北市植物園の一角にある国立歴史博物館は、裏庭の広大な蓮池も有名で、一部改装中の建物の一階全てを使って三つの仏像展という徹底振りです。「北朝一展」は五胡十六国～隋代で、博物院と少し異なっていますが、総数70点の内、ここでも北斉のものが多く29点です。出品者は殆どが博物院への出品者と同じであり、館の所蔵品はごく僅かでした。中国では同時に二つの博物館の展示を賄える優れた自国の作品が民間に所有されているということになり、圧倒される思いでした。博物院には一点も展示されていなかった方形碑像や塔、また銘文を持つ作品も多く、中でも展示場に入って最初に見ることになる北斉皇建2年（561）の碑像は驚くべき高いレベルのものです。交脚弥勒五尊と双樹下で説法する壮麗な釈迦七尊を表面に、裏面には悉達太子の愛馬と御者との別れの場面を、いずれも写実的で精緻な描法で高浮彫りしています。また、同時代の塔形の四面像、隋の漢白玉の壺形をした舎利塔なども珍しいモチーフを豊富に備えた見事なものでした。単独像としては、先ず、北魏の熙平元年（516）の弥勒菩薩倚坐像が挙げられます。細身で衣の赤・青の彩色が鮮かで、その裾を鰭状に段々に広げた様は飛鳥仏タイプです。敦煌の壁画から抜け出たかと思われる華やかさでした。その他、北周の漢白玉による豊かで愛らしい相貌を見せる半跏思惟像、荘重な宝冠を被った隋の如来立像など、魅力的な作品が多数ありました。

「宋元木彫一展」は、中国の古代大型木彫像の極みを示しており、数は7件ですが、安楽坐で坐る宋・元の観音像には迫力があり、宋の仏坐像は重厚で、それぞれ寄木造りの苦労も忍べるものです。17点揃った宋の羅漢像もそれぞれの彩色やポーズが楽しめました。宋代大型木彫像の世界に残る作品を所蔵者別・写真入りの表で示していたのは親切でした。

「金銅一展」は殆どが明・清と思われるもので菩薩像が多く、それらに時代の表示が無いのは研究者としては残念でした。

両館ともに石雕、木雕、金銅仏の展示でしたが、総じて石雕はどちらも名品揃いで、北斉の如来像には着衣や衣文・頭髪表現にインド的な要素が見られ、東魏・北斉・北周・隋の菩薩像は装飾の精巧な造形を競い、菩薩像の美の極致を示していました。図録もA4判・オールカラー、側面・背面図、概説や論文を盛り込んだ立派なものです。

折りしも台湾は八十六回目の国慶節を控えて、その予行演習などが行われていました。帰国前日の10月10日は、終日、総統府前の広場や、国父紀念館などで催しがあり、夜には花火が打ち上げられました。街中でも人々は夜空を見上げて歓声を上げ、秋の台北はさながら、祝賀の花火と古代の仏像に彩られたのでした。　（村田靖子）

仏頭（東魏）　歴史博物館展示

故宮博物院

菩薩立像（隋）　故宮博物院展示

季刊 美のたより No.121
平成9年11月14日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.